

世界最凶の個性『らしい』（憑）

ワカガシラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「人の夢は——終わらねえ!!!!」

無個性なデクを教えてくれたのはオールマイトでも親でもなく、真っ黒な髪を生やし
たオジサンだった。

「ゼハハハハハハハハ!!!!」

目

次

3話 2話 1話 プロローグ

30 20 11 1

プロローグ

「——個性はなくとも、ヒーローは出来ますか!?」

緑色の髪をした、癖毛の目立ついかにも根暗そうな少年が声を発した。発した先はこの国にいれば誰もが知っている人物、いや、この世界なら彼の名を知らない人はいない。

『オールマイト』

唯一無二の絶対的平和の象徴。

2人の体格差は歴然としており、まさにオーラが違うとも言える。

片や王道をあゆみ続けた英雄。

片や王道を外れた落ちこぼれ。

それは個性社会が生み出した格差とも言える。

派手な個性と人の良さで登りつめた象徴としての席、何か一つでもなければその場所へと辿り着けなかつただろう。

そして、その全てを支える『個性』が落ちこぼれの少年にはなかつた。

「個性のない人間でも……貴方みたいになれますか?!?」

心を振り絞つてだした言葉。

今のご時世、個性が無いだけで虐められることなどざらだ。更にいえば個性がない、つまり無個性の事を悪と捉える人たちもいる。

片や底辺と頂き。ただの有無だけで彼の人生はお世辞にも良かつたとは言えなかつただろう。

だが、その少年が勇気を振り絞り、覚悟を決め、残酷な現実へと立ち向かつた。

——だが返つてきた答えは残酷な現実だつた。

大人なら濁すことも出来ただろう。だがそれをしなかつた、それはオールマイトが彼に感化されたからだ。あの熱意に、あの意地に。

生まれた時から先天的なもので生き方が変わる世界。

そしてその『個性』^{才能}がなければ務まらない職種であるヒーローに憧れてしまつた憐れな少年。

夢を見続けていた少年は、やつと夢から醒めた。

――――――――――

そして、その少年は帰る。

何も無かつた自分には、やはり何も出来ない。
その事実だけが重荷になつてのしかかつた。

『夢を見ることは悪いことじやない。分不相応なものを――』

言われた言葉が頭から離れない。

トップに立つオールマイトですら重症を負つてやつとの状況でヒーローをやつてい
る。

それなのに……。僕は……。それでも僕は、……。

「今日は散々だつたな……」

ヴィランに襲われている幼馴染を助けたら、プロのヒーローに怒られた。

『無個性が出しゃばるんじやない』

『君がそんなことをする必要はなかつた』

『君の行動がどれだけの人に迷惑をかけたのか分かっているのか』

口には出さないけど僕は「なんで?」と思つた。

有利な個性持ちが来るまで待機?

それってヒーローなの。

僕が憧れたヒーローは、そんなの関係なく笑顔で人を助けていたのに。

「……なんで、なんで僕には個性がないんだ…」

「——何言つてんだ坊主」

「え!？」

誰もいなかつたはずなのに…。

今まで周囲には人は居なかつたはずなのに…。

その疑問が疑惑に変わる頃、真っ黒な髪をしたオジサンは手にあるチエリーパイを齧つた。

サクサクとこちらの気持ちもよくなるほどいい食感だということが、こちらにまで伝わつてくる。

「ゼハハハ!!このチエリーパイはやつぱり最高だ!!」

「アナタは……」

「なあに、ちよいと坊主のことを見てたんだよ。オールマイトと会つた所からヴィランから友達を助けようとした所をな」

一瞬少年に悪寒が走つた。

ずっと付けられていた??

その事を理解した途端、少年は背中に冷汗が渡つたことが分かる。

「——なれるぜ、ヒーロー」「え？」

言われた言葉に詰まる。

訳の分からぬオジサンだけど、諦めたハズの道を肯定してくれた。

「アーヴィングらのいうヒーローなんて糞だ」

チエリーパイを置き、オジサンは酒瓶で流し込んだ。

僕は子供だから分からぬけど、とても満足そうな顔をしている。

まだお酒が残っている酒瓶を上に挙げて、勢いよく地面に叩き付けた。割れるのではないかと思えるほど強い衝撃。

「人の夢は――終わらねえ!!!!」

その衝撃に近辺の家のの人達が出てきた。

大の大人が、などと笑われているがオジサンはそんなことお構い無しに続ける。

「そうだろお!!!!」

無個性だつて医者に言われてから僕がずっと欲しかつた言葉。謝罪や否定なんかじゃない。

肯定だつた。誰かから『ヒーローになれる』そう言つて欲しかつた。
だから見ず知らずのオジサンに言われた言葉が僕の胸に刺さる。
親からも憧れの人からも、決して言われることがなかつた言葉。
堪えなければ泣いてしまいそうだ。

「人を凌ぐつてのも楽しじやねえ。ゼハハハハハハハハ!!!!」

オジサンはそう言いながらも笑う。
羞恥など微塵も感じさせない。

近隣の人はこのオジサンを子供に見せないようにしたり、後ろ指を指したりして笑つている。

でも、僕にはそんな風には見えなかつた。

ただただカツコイイ。

僕の中でこのオジサンはオールマイトに匹敵するくらいにかつこいい存在になつていた。

「笑われていこうじゃねえか。ゼハハハハハハハハ!!!」

一頻り笑つたらオジサンは地面から立つて愉快に立ち去つた。
「つと、邪魔したな坊主」

「ぼ、僕は——」

——ヒーローになれますか？

このオジサンに聞いておきたかつた。僕のことを馬鹿にしない、夢を見ろつて言つてくれたこのオジサンに。
でも言葉が出てこない。

オールマイティみたいに拒絶されたらと思うと……僕にはあと一歩進むことが出来ない。

「なれるといいな、最高のヒーローに」

僕は応えることが出来なかつた。

やつと欲しかつた言葉を言われたから、やつと僕を肯定してくれたから。
だから僕は――。

無個性でも、最高のヒーローになる。

誰に何と言われても構わない。

だつてこのオジサン以外誰も僕の本物を見つけてくれなかつたんだから。
ならなんて言われても関係ない。

無個性だから無理？

違うだろ。そうじやないだろ。

無個性でも出来るんだ。

無個性だからこそ出来るんだ。

僕は……最高のヒーローになる。

1話

とある昔。個性が発現し始めたほど昔のことさ。

そこではとつて狙つたかのような都市伝説がでたのさ。無個性な奴でも食べれば忽ち個性が発現するつてモノがな。

当然眉唾だと嘲笑つたよ。そんなものある訳ねえってな。個性に関して全く研究が進んで切つた時代だ、無個性がいる時点で、その理由が判明していない時点で有り得ねえつて。

だが今になつて思う。

あれは存在していたんじやないかつてな。

食べれば忽ち個性が発現し、その代わりに世界から嫌われる。こんな島国じやデメリットが多すぎる代物だ。

名前？おいおい探す気かよ。そうだなー、確かすんげえ物騒な名前だつたな。
でもかなり前のことだつたし俺も記憶が曖昧なんだよ。

あー、 そうだつた そうだつた。

『個性の果実』 又の名を『悪魔の実』 つて呼ばれてたよ。

――――

「ゼハハハハハハハハ!! 久しぶりじゃねえか! オールマイト!!」

「H A H A H A ! やあ『黒ひげ』 今日こそ捕まえちゃうぞ!!」

パツパツのヒーロースーツを着た筋肉の塊が、 黒ひげと呼ばれた男に拳を向けた。 それはNO・1ヒーローであるオールマイト。

そして向けられた黒ひげは、 ウイスキーをラップ飲みして独特な笑い方で声を荒らげて いる。

「ゼハハハ！無駄とは言わねえぜ！！この世に不可能なんてねえんだからよ！！なあ！オールマイト!!」

パツパツのヒーロースーツは破けてしまうのかと思うほど筋肉が肥大化して拳を握る。

「DETROITSMASH!!!」

「黒水」

天候が変わってしまう程の暴力。

その目にも留まらない速さで放たれた攻撃を片手で受け止める黒ひげ。

方や音速を超えた拳、方や光を飲み込む闇。

「ゼハハハハハハハハ！俺に個性は効かねえ!!」

「そんなこと知ってるさ！！だから君が処理できないスピードで連打すれば!!!!」

一発一発が天災。その攻撃を何度も受け凌ぐが、化け物と張れるほどの身体能力は持ち合わせていない黒ひげ。

更に引き付けやすい体質の黒ひげからすれば、オールマイトの拳は二倍増しで自分の体に引き付けられる。

凌ぎ続けた黒ひげだが、限界を迎える。

一瞬、目に見えただけでも五発モロに食らつてしまつた。

骨が碎ける音と共に黒ひげは吹つ飛ぶ。

その巨体はビルを砕き進み、電柱をへし折る。

そうやつて幾多もの障害物に衝突して、やつとの思いで黒ひげは止まつた。

「痛てえ!! 痛てえ!! ちつくしよう……あの野郎、殺す氣で殴りやがつたな」
数秒ほどのたちうち回り立ち上がる。

頭から血が流れており、今にも医者に見せなければいけないほどの重症だ。
「チツ、あの野郎本氣で俺を捕まえる気じやねえか、ゼハハハハハハハハハハ!!!」
吹つ飛んだ黒ひげを高速で追つてきたオールマイト。

直ぐに追撃を仕掛けようとするが、防戦一方だった黒ひげが初めて先制した。

〔黒水くろうす〕

オールマイトのパンチを受け止める為に使つていた技。

それを最初から使う意味をオールマイトはまだ理解していない。

だがオールマイトが理解する前に、体が先に動いた。

「引き寄せられている!!」

慌てて踏ん張ろうとするが、高速移動してきたばかりのオールマイト。自分から向かっていた力もあり、留まることが出来ずに黒ひげの真っ黒な手に顔を握りしめられた。

「オラツ!!」

ドン!!と地面が揺れる。

オールマイトがコンクリートの地面に叩きつけられ、地割れを起こしたのだ。
「おつと、まだだぜ!!」

黒ひげはオールマイトの顔を握つたまま、真っ黒い影のようなものを放つていた手が
急に光を発した。

その異変に今度はオールマイトの長年の勘が訴えかけた!!あれはヤバいと。

黒色じや無くなつたからか、力も入るし引き寄せられる力もない。故にその手からの
脱出には成功した。

巨体にも関わらずスルリと抜けたし、黒ひげから距離を取るオールマイト。

自分がいた場所が更に地割れを起こし、街中にもかかわらずに地震のような揺れが起
こり始めた。

「ゼハハハハハハハハ!! 上手く避けたじやねえか!! それでこそNO. 1ヒーローつて
もんだぜ!!」

「黒ひげええええええ!!!!」

鬼のような形相でこちらに強力な攻撃を使用とするが、黒ひげはピクリとも動かな
い。

オールマイトは最初このことを技の後遺症のようなものだと思ったが、それは違うと
直ぐに理解出来た。

黒ひげが笑っていたのだ。

それも満面の笑みで。

「おいおい！ いいのかよオールマイト。今地震でいくつものビルが壊れたぞ。確か
ここら辺には老人ホームがあつたよなオールマイト。ゼハハハハハハハ!!!!
「いいのか？ ここで暴れちまつて。俺は一向に構わねえぜ!! ゼハハハハハハハハ
!!!!」

「ヒーローは多いよな、守るものか!!」

黒ひげが余裕になつた理由が分かつたオールマイト。
 確かにこのまま続けば確実に死者が出る。オールマイトはそれが分かつてゐるが、そ
 れでも今黒ひげを捕まえなければ取り返しがつかないと直感する。

黒ひげ自身が悪の王様、オールフォーワンと同等の存在になるような気がしたから
 だ。

だがオールフォーワンほどの不気味さは感じられない。精々小悪党が限界だろう。
 だが拭い切れない何かがある。

「CAROL AIMAS MASH!!!」

先手必勝。

あの引き寄せられる前に、先にオールマイトは仕掛けた。
 これ以上暴れさせないために。

いつもの黒ひげならトンズラこいて逃げるが、今回はそうじやない。
 そしてこれ程までに強い個性だつたことにオールマイトは焦りを感じてゐる。
 もし黒ひげが地震を起こせる個性なら……

考えただけでもゾツとする。本物の天災が目の前にいるのだ。

それを悪用することに躊躇いなどは一切ない。

確実に捕まえなければいけない。

両手をクロスして、黒ひげに手刀を繰り出すオールマイト。

それに比べて黒ひげは、左の手で拳を作り大きく振りかぶっていた。それはオールマイトとは違い、カウンターを狙っているかのように。

オールマイトの高速移動で手刀が黒ひげの首に到達すると思われたその一瞬。

空間が割れた。

「海震!!!」

到達すると思われた手刀が止まる。

空気が割れ、空間が裂け、大気が震える。

少し前に引き寄せられたオールマイトは、全く逆の斥力を感じことになった。
しかもその衝撃は震えているかのようにこちらに伝わる。

そしてオールマイトは黒ひげをぶつ飛ばしたお返しと言わんばかりの速さで、ビルを

突き破り遙か彼方へと飛ばされた。

「帰つてこられたら困るからな、ここいらでトンズラさせて貰うぜゼハハハハハハハ
!!!!」
ハ

2話

薄暗いBARの中、顔面に手のマスクをつけている異端児とBARのバー・テンダーがいる。

そして異端児、死柄木弔はモニター越しにある人物と対面していた。

『死柄木弔、彼は手放してはいけないよ。間違いなく君に成長を齎してくれるだろう』

「あんなオッサンさつきと殺した方がいいって」

モニターに写っているのはノーフエイスとでも言うのか顔がない。

ガリガリと首の大動脈付近を爪を立てて搔きむしっている。

「ゼハハハ!! つれねえこと言うなよ死柄木。仲良くやろうじゃねえか!!」

「馴れ馴れしいんだ、のクソジジイ。塵にするぞ！」

『黒ひげも死柄木弔の事をよろしく頼むよ』

「任せておけオールフォーワン。俺の為にも死柄木は必要だ」

『成程、
ところでそろそろ教えてくれてもいいんじやないか？君の目的とやらを』

「そいつは野暮つてもんだぜオールフォーワン。お互い不干渉つてのが組む条件じやなかつたのかよ。この調子じや同盟も長く持ちそうにないなゼハハハハハハハハ!!!」

卷之二

笑つてゐる黒ひげに耐えきれずに死柄木弔が五本指を立てる。

辺りにいた黒霧も動搖するが、それは杞憂に他ならない。

八八八八八八八八

「は!? なんで効かねえんだよ! おい! 黒霧!!」

動搖する死柄木弔。

そもそもそのはず、自分が五本指で触れたものは何もかも塵として来たのにそれが目の前の男には通用しない。

その事実だけが死柄木弔の脳裏に酷く焼き付いた。

絶対だつた自分の個性が、何の変哲もない小悪党のようなオツサンに効かない。そしてその事実が許せなかつた。

「私にも何が何だか」

黒霧も顔は見えないが動搖している。

死柄木弔の個性が効かないとしたら、もしや自分も……と。

『あまり虐めてくれるなよ、黒ひげ』

「なーに、俺は何もしてねえぜ。俺はただ黒霧のチエリーパイを食つてただけだ。おい！ 次もつてこい』

「は、はい。ただいま」

黒霧は皿拭きをしていたが、オーブンの方へと慌てて駆け出し。先程から作っていたチエリーパイを持ってきた。

その数およそ10枚。

サクサクと食べながら雄叫びを上げるかのように笑い、酒を飲む。

「このチエリーパイは格別にうまい』

「おい！ オツサン！」

「なんだよ死柄木？ まだオツサンに用でもあるのか？ 小便でも漏らしたなら愛しの先生にでも替えてもらえよ！ えつ！！」

『ここまでにして貰おう黒ひげ』

怒り狂いそうな死柄木弔をよそに、オールフォーワンは黒ひげを制止する。さもなければ内部抗争が始まつてしまふと分かつていたからだ。

そしてオールフォーワンは知つてゐる、黒ひげという人物の危険性を。

それこそ死柄木弔のように小さい頃から洗脳教育していれば、自分の後継者になれる器である位には。そして驚異になつた今、手元に置く方が監視しやすく死柄木弔に良い影響を与えてくれると思つたのだが……。

どうやら、その目論見は半分成功して半分失敗したようだ。

「ガキを虐めるのも可哀想になつたからな！そろそろ俺もお暇させて貰うぜ!!じやあなオールフォーワン、仕事が入り次第また呼んでくれや。お互オールフォーワンいの目的のために、俺は武力を提供する。そしてお前は情報を提供する。いかにも悪党じやねえか!!ゼハハハハハハハハ!!」

『ああ、恐らく君の目的も我々の目的と当るずとも遠からずだろう。なんせ君の必要な情報はオールマイトなんだから』

『腹の探り合いは止せオールフォーワン。その言い方だと、またいい情報でも掴んだな?』

『まあね』

「仕事のできる人間はモテるぜ色男。それで？ 捆んだ情報はどんなもんだ？」

『――雄英高校での課外授業の事さ……』

――――――――――――

「私思つたことなんでも言っちゃうの、緑谷ちゃん」

「あ、はい蛙吹さん」

場所は変わつてバスの中。

緑谷出久はある人生を変える分岐点から、ただひたすらに個性持ちと戦えるようになるために訓練を重ねた。

憧れだつた人の提案を断り、自分が無個性であることにはこだわつた。

その結果が少し昔まで流行つていた都市伝説を実現することだつた。

誰も信じなかつた都市伝説を、自分が証明して見せたのだ。その年代のシニア世代からは賞賛されたが、緑谷達若者世代からすれば訳の分からぬ力だつた。

「緑谷ちゃんつて本当に無個性なの？切島ちゃんの個性と似てるよう見えるんだけど

「ううん、僕の力は個性なんて大層なものじやないよ。あらゆる生物が生まれた時から持つてるものを引き出しだけだよ」

「それなら私にも教えて欲しいわ」

「え？」

蛙吹の一言に戸惑う緑谷。

自分が模索した唯一無二の武器を教えてとは、つまり僕の存在意義が無くなる。

「ごめん、流石にそれは…」

「私も悪かつたわ、無茶なお願いして」

「まあ！でも派手で強えつたら爆豪か轟だよな」

「爆豪ちゃんは切れてばかりだから人気でなさそう」

「んだと！コラだすわ!!」

楽しい談笑。

その数分後に本来ヒーローが戦っているものを目の当たりにすることになる。
ただ一人、ただ一人だけこの中から本物の英雄が誕生するのはまだ先の話。

「もう着くぞ、いい加減にしとけよ……」

担任の相澤の言葉でワイワイしていたクラスメイト達は一気に真剣な眼差しに変わった。

何か決意を決めたものに、何かを誓つたもの、そして――。

「——以上、ご清聴ありがとうございました」

13号先生による個性がもたらす危険性についての持論を語り終えた。

個性でそうなら、なら僕は、無個性はどうなるんだろう。

恐らく1人だけ、恐らく僕だけはそう考えた。

別に珍しいことじやない、個性を特別視する人達のことは、刃物や拳銃と同じだ、使う人によつて目的が変わると言いたいんだろう。

だけどここの人達は必ず個性が、とまず個性の話をする。それを僕は差別として捉えてしまう。

これは僕がおかしいんだろうか……。

「——！」

緑谷は探知系の個性がない今、この集団で一番探知能力が高い。

それは気配を読み取る力であり、個性では無い。野生の獣のように本能で気配を探知したのだ。

遅れてプロヒーローであるA組の担任のイレイザーヘッドが気配に気付いた。

「——かたまりになつて動くな!! 13号! 生徒を守れ!!」

「なんだありや、入試ん時見たくもう始まつてるパターンか?」

「動くな!! あれは——」

「^{ヴァイラン}
敵だ!!!」

真っ黒な煙の中から出てきたのは、途方もない悪意の塊。
何度か見た事がある、だが自分が対面することになるなんて初めてだ。

「13号にイレイザーヘッド、先日頂いたカリキュラムにはオールマイトがここにいるはずなのですが」

「こんな大衆引き連れて来たのに、オールマイト…平和の象徴がいないなんて……ガキを殺せば出てくるかな？」

そして僕は目を疑つた。

初めて見た時は確かに働いているように見えなかつたし、まともじやないと思つていた。

でも、僕を救つてくれた人が……。

僕が道を進むことを肯定してくれた唯一の人が——。

まさか敵側に居るなんて。

「ゼハハハハハハハハ!!! オールマイトがいないつて？まあいい、プロ二人に卵か、肩慣らしには丁度いい!!! 楽しんで行こうじやねえか!!!!」

3
話

「お！オメエあん時の坊主か!?」

ヴィランとして対立しているのに、黒ひげは全く危機感のないことを言う。そして声をかけられた張本人である緑谷出久は、どうしていいか分からぬがとりあえず頷いて見せた。

「無個性でオールマイトにも捨てられたオメエが卵たあ。いい!!いいじやねえか!!!!口マンつてモンが詰まつてやがる!!!!持たざる者がこのステージに立てたんだ、まぐれでも何でもいいじやねえか!!!」

褒めているのか、それとも貶しているのか：分かり難いから緑谷は考えることを辞める。

この人の思考はかなり吹っ飛んでいる、対面したことは今回を入れてたつたの二回だけど、それでも昔から知っているかのような扱いが出来た。

「だから!!!!生き残つてみろよ!!坊主!!!!」

「――お喋りはそこまでにしどけ、ヴィラン」
迅速。

まさに忍者の如く速さとしなやかさで黒ひげとの距離を詰めたイレイザーヘッド。
すぐさま個性を使い、得意の捕縛術で黒ひげを縛り上げる。

「お！なんだこれ!?」

イレイザーヘッドは所謂マイナーヒーロー。

オールマイトのようにメディアにあまり晒されていないから、戦法が分からない。
よつてヴィラン側の対応が遅れる。

そしてイレイザーヘッドはその隙を見逃さなかつた。

縛り上げられた黒ひげはイレイザーヘッドによつて引き上げられ、そして地面に叩き
付けられた。

「ガバッ!!」

叩き付けられた衝撃で黒ひげは血を吐き人体に致命傷とは行かずとも、重症レベルの
傷を負わされる。

「いてえ！があーー!!イツテエエエエエエエエ!!」

数合わせの雑魚ヴィラン達と同じように広間に転がされる。瞬く間に広間には20人近くイレイザーヘッドによつて転がされていた。

「チツ、あのオツサン：舐め普しやがつて」

「それでは私は卵達の方を」

死柄木弔は悪態をつき、黒霧は生徒と13号の所へと個性を使つて移動した。そして黒霧は手笞通り、固まつて動いていた生徒とプロヒーローを引き剥がし、別々の場所へと転移させた。

「ゼハハハ!!なんでも吸い込むつてか!?掃除機かよ」
「品のないヴィランですね!!」

イレイザーヘッドにダウンさせられたと思った面々がここに居れば目を疑つただろう。何せ言動はデカいものの瞬殺された雑魚ヴィランがプロヒーローでありこの中の雄英組では最強に位置する13号と互角の戦いをしていたのだから。……いや、むしろ13号は劣勢とも言える。

黒ひげは13号のブラックホールが発動したと同時に、そこいらで伸びている雑魚ヴィランを手に取つて13号に投げつけた。

「な!?」
13号は急いで個性の発動を止める。

当然意識のないヴィランはブラックホールの中に吸い込まれることは無かつた。

「おいおい、プロヒーローともあろうモンが悪党一人殺れねえのかよ!!」

「僕達はヒーローですからね、殺しはしないんですよ」

「それは違えだろ、見たところお前さん人を殺せねえな?」

「何を根拠に」

「なーに、簡単なことだ。殺れる奴と殺れねえ奴には決定的な差がある。あつちの包帯の兄ちゃんはやる気になれば殺れる奴さ。だがお前は違う、いや、既にやつてるからテメエにこびりついてるのかもしけねえなぜハハハハハハハハ!!」

恐らく黒ひげの言葉は的を射ている。

実際13号はヴィランを一人として吸い取つていない、身動きを取れなくさせるために個性を使つてゐるだけだ。

決定的だつたのが、黒ひげがヴィランを投げた時に個性を自発的に止めたことだ。そこまで見ればどれだけ馬鹿でも答えにたどり着ける。

「俺とお前さんの個性は似てゐる。だが俺とは決定的な差があるんだよ」

能力

ブラックホール

「それは俺が悪党だつてことだ!! 黒穴道!!」
「それは僕の専売特許で——」

すぐさま異変に気付く13号。

それはまさにイレイザーヘッドの個性のように、全く個性が発動しなかつたからだ。だが黒ひげから放たれる闇は止まつてくれない。それは13号の足元に海のように広がり沼のように沈んでいく。

「なんで、僕の個性が!!!」

「不思議か? 自分の個性が発動しないことが? 俺に言わせりや常に個性が使える方が疑問だぜ」

「何故疑問をそのままにしておく?」

「何故個性は生物に宿る?」

「何故無個性は生まれてくると思う?」

「何故個性婚は存在すると思う?」

黒ひげから語られたのは、この世でまだまだ分かつていない未だ未知の部分だった。個性とは何か、突然あらわれた超常の力。

それを日常的に使うが本当は分かつていない。例えば火を吐く個性があつたとしよう。

そしてその次の疑問は、それはどうやつて起こっているのか。特殊な器官がある訳でも、息が特殊な訳でも何でもない。

なのに何故火を吐けるのか。

揃えて皆は口にするだろう「分からない」と。

だが分からるのはいい。それはまだ誰も調べたことがないのだから。だが何故それを分からぬままにしているのだろう。

それこそが黒ひげの最凶最悪とも言われる所以だ。

誰も黒ひげを理解していない。

彼は一人の敵である前に戦士である。

そして戦士である前に黒ひげという人物は――

——学者である。

飲み込んだのは13号だけに非ず、辺りに転がっているまだ息のあるヴィラン達も闇に飲み込まれた。

辺りには人の欠片もなく、ただ黒ひげ以外はいない。

「ゼハハハハハハハハ!!!プロヒーローもこんなもんかよ。この調子じゃ雄英高校落とすのも楽勝だぜ!!!」

懐にあるウイスキーを飲み、独特な笑い方で周りを見渡す。

どうやら、もう一人のプロヒーローは最初の中央広間にいるので、自分も其方へと向かおうと決めた。

「おつと、忘れてたぜ。今出してやるよ」

「解リベレイション放」

そう言つて闇から放たれたのは大勢の人。

ヴィランから施設の建物やらと飲み込んだ何もかもが吐き出された。そしてその中に先程まで黒ひげと戦っていた13号も出てきた。

「お前の個性も中々だが、完全に俺の下位互換。必要ねえな」
黒ひげは意識のない13号にそう吐き捨て移動した。

途中にラッパ飲みした勢いで、喉に絡まつた痰を宇宙服を着て倒れている奴の顔面に吐き捨てた。